

東南アジアの船旅(3)

大阪大学経済学部 長 浜 穆 良

遅い船

船が東京の晴海の埠頭を離れたのが昭和46年2月5日、神戸港に帰国したのが3月27日、その間2万数千キロをだいたい16ノットぐらいでのんびり巡航したが、この船旅の記は、その(1)の原稿を46年の6月、その(2)を11月に提出し、今回がやっと3回目である。船は遅いようでも、目的地へほぼ直線に一刻も休まず進むので意外に速い。しかるに、この旅行記はこのぶんだといつ終わるか予想もつかない。そこで思いきって、今回を含めて、あと2回でおえることにした。ぼつぼつ記憶が怪しくなるし、内容が陳腐化する危険もある。

さて、前回のおしまいのところで、船はジャカルタに名残りを惜しみながら、46年2月22日タンジョンプリオク港を出港して、つぎの訪問国マレーシアに向ったのである。

翌23日、曇天、海はおだやかで、船はボルネオ、スマトラの間をシンガポール方面に滑べるように進んでいく。右舷はるかに本船に平行して空母らしきものがみえるとの情報はいったので望遠鏡を借りてのぞいてみると、確かに大型の航空母艦であり、駆逐艦が後続し、飛行甲板には多数の人間もみえる。レーダーをのぞかせてもらおうと距離は約12キロ、空母の右うしろに駆逐艦が護衛している。むこうも暇とみえて午前中ずっと平行して航行し、やがて静かに離れていった。

夜には私が副担任をしている6組所属のマレーシア代表の青年ナイドー君の送別会が、クラスメートの主催で行なわれた。コーラにピーナツの質素なパーティーで、メンバーがそれぞれ、かくし芸などで彼を励ました。順番が彼にまわると、まずお祈りをしたいと断わって、合掌し、ヒンズー教式の祈りを熱心にやり、最後に「オーム」と大声をあげて締めくくった。祈り

の意味は「物よりも知恵を愛する1人の青年がいた。…」というようなことだそうだが、最後の「オーム」という祈りで、私はすぐにヘルマン・ヘッセの小説「シッダールタ」の中でこの言葉が使われていたことを思い出した。宇宙の真理の表徴と考えられている彼らの聖音が、あたかも作中主人公のシッダールタによって発せられているかのように思われた。

ナイドー君はマラヤ大学医学部の助手だそうであるが、弁護士になるための勉強中で、助手といっても医学を専門とするのではなさそうである。非常な議論づきで、食事ごとに隣に座って毎日、政治・経済問題を吹きかけてくるので英会話力の乏しい私はついに日本語の方までおかしくなり、軽度の言語障害をきたしたので、食事中の討論に限り辞退を申し出たほどである。インド訪問後シンガポールに寄港したとき、彼は懐かしさのあまり、マレーシアの首都クワラランプールから数百キロをタクシーを飛ばして会いにきたほど人なつっこい青年である。

この頃、船内にはインドネシアの新聞にあらわれたわれわれ青年の船に関する記事の切抜きが張り出された。好意的なものが多いが、中には「彼らは1941年に起こったことを知らないのだ。彼らは、こんどは経済侵略の尖兵か。…」というようなものもあった。

ポーツエッテンハム港(2月24日)

24日午後4時クワラランプールの外港、ポーツエッテンハム新港の岸壁に接岸。歓迎は非常に盛大で各種青少年団体の制服は英国式、インドネシアに比べて格段に豊かな印象をうける。港湾施設の建設工事もこの国の経済力からすればかなり大規模のものである。隣接する旧港は文字通り河口にあるが、新港も対岸に島があって河口のようである。この頃、干満の差は4メートルもあり、朝、船から岸壁にかけられ

た急傾斜のタラップが夕方には干潮で水位が下って水平になっている。

シンガポールが独立したために、マレーシアはこの新港によって直接貿易を促進しようとしており、抜群の港湾サービスを誇るシンガポール向け鉄道貨物に高率の差別運賃まで適用して当港への貨物誘致をはかっている。建設の槌音は高らかであるが、まだまだ横浜港と田舎の港ほどの差はある。

この港は後日、改名され現在ポートケランとよばれているが、われわれにはポートスエッテンハムの方がぴったりくる。マレー半島のこの付近の海岸はえんえんたるマングローブの林で海水はこの林のかなり奥まで入っている。樹高はそう高くはないが密度は濃く見渡す限りびっしり繁茂している。干潮時にはざるを伏せたような根元の部分が水面上にあらわれるが、ここに蟹がわんさという。

ポートスエッテンハムの蟹は船員の間ではよく知られているようで、噂は日本を発つ頃から聞いていた。小さな港町、というよりは旧港に面した村とでもいうべきところに、中国語名「港景」英語名「Port View」というレストランがある。旧港には何隻かの貨物船が入っておりその背景は燃えるような夕焼けであった。ようやく暮色の迫る頃、さっそくここで話題の蟹を食べることになった。2階の海側はベランダで戸障子はなく吹きとおしになっており、2・30人の席は白人、中国系等々で満員である。かなり遠くから食べにくるらしい。ビールの名は「アンカー」このビールの「アンカー・イズ・ベスト」というコマーシャルは大阪ガスの「ガス・イズ・ベスト」というのに似ていて妙な気がした。ところで、ポートスエッテンハムの蟹は、これこそまさに天下一品である。あのハサミの部分、まるで人間に食べられるために生まれてきたように、ちょうどピンポン玉のような格恰をしていて、中身がこぼるとれるのである。この他、エビの蒸したもの、麺類、フライ物などたらふく食べて1人当たり7百円ぐらいであった。夕風にあたりながら、暮れゆく港の風景を眺め、気の合った同行者と他愛のない話にふけり、知る人ぞ知るポートスエッテンハム

の蟹を味わったこの思い出はいまなお強く脳裡に刻み込まれている。

労働大臣表敬（2月25日）

マレーシアの首都クワラランプールはその外港ポートスエッテンハムから40キロばかりの内陸にあり、その間はハイウェイで結ばれている。沿道は果てしないゴム林であるが首都郊外には赤土のみえる工場・住宅用の造成地がかなりみられる。マレーシアは世界最大のゴム、錫の産出国で、それぞれ世界の4割に達しているが、首都周辺はそれらの中心点な産地である。この付近に多数点在する錫の露天掘の、廃坑を埋めた造成地が、郊外、ペタリンジャヤの新興住宅および工業地区である。

マレーシア人口の3割5分は中国系であるから看板には漢字が多く「最高尚之住宅区」「洗衣店」「美髪院」「月事」「汽車保養処」など日本人にもよくわかる。ただし汽車保養処は自動車修理工場のことで、モーターバイクは機車といわれている。複合民族国家であることがマレーシアの特徴でマレー人が44.7パーセントで最大ではあるが過半数には達していない。タミール語を話すインド系人も1割はいる。したがってラジオのニュースもマレー語、中国語、英語、タミール語でやらなければならない。学校の運動会のプログラムをもらったが、これも同じ内容を4カ国語で印刷してあるので1枚の紙ではすまず、小冊子になっている。

マレーシアの労働省は都内の中央官庁街にあるが、他の省庁に比べて、質素な木造建築で規模も小さい。この日は労働問題に関心のある青年を引率して、まず労働大臣に表敬に行った。発展途上国の大臣は一般にタフな感じで、レスラーのような堂々たる体格の人が多い。労働大臣もたくましい偉丈夫であり、精肝な闘志のみなぎる美男子である。東洋の君子国の先生がその横に立ったり座ったり、われながら矮小でみじめな感じだったが、何とか一応の挨拶をおえて責任を果たした。翌々日の中国系新聞、星洲日報に掲載された大きな写真には、つぎのような説明がついていた。「日本青年親善訪問団三十二団員、由領袖長浜氏率領、拜会勞長且士昆馬尼加華沙甘、図示勞長鑑賞該団所贈雕像之影」。



マレーシア労働大臣(左)と筆者

表敬の後、中央職業安定所にまわって所長からマレーシアの、というよりは都市部の労働事情の説明をきき、また、所内の見学を行なった。人口の都市集中化の傾向が強く、職を求めて密集する求職者の就職率は30パーセントとのことである。ここでは大学を出ても容易に就職できないらしく、多くの知的な感じの青年が真剣な表情で就職の相談にきている。所長は雇用促進の観点から日本の直接投資を大歓迎すると力説したが、実際、日本の投資のウェイトは最近急速に高まってきている。

産業訓練所(職業訓練学校)では日本技術者の指導によって、工作機械による工作技術、テレビ組立技術等の指導が、相当の設備を用いて行なわれているが、ここで訓練を受けた者も就職を保証されているわけではなく農漁業に従事していく者も多いらしい。帰路にたち寄ったゴム工場(生ゴムからベッド用のマットを製造している)も決してよい作業条件ではなかったが仕事があるということだけで、若い女子従業員たちの表情は非常に明るく、ちゃんとした所に

就職して給料がもらえるのが魅力のようであった。

2月26日の主な訪問先はマラヤ大学の予定であったが、当日になって変更されることがよくあったうえに、率先してガイド役を買って出た例のナイドー君が、今日はマラヤ大学は休日で行ってもだめだ、飛行場を案内する、マレーシア側の公式ガイドもそういっている、というので、多少気にはなったが、彼の言にしたがひ、われわれは大学の代わりに飛行場へ案内された。空港ビルは日本のような能率一点張りの殺風景たものでなくじゅうぶん鑑賞に値する、それ自体が1個の芸術作品である。このコーヒーはポットに入れてきたものを自分でカップに注ぐようになっており、ポットには2カップ強は入っているので、お代わりをしても飲み残すことになる。温度、味、サービスは非常によくて値段は100円である。手洗いにはインド人がうやうやしく紙タオルを開いて待っている。日本の青年たちはチップもやらないで「サンキュー」で済ませていたが文句は言わなかった。

この日はレークガーデン、国立記念碑、仏教のお寺、場末の住民のいく市場などを廻って帰船し、興味深いことも多かった。が、さて帰船してみると大問題が起こっていた。本日の訪問予定先のマニラ大学では休日にもかかわらず歓迎委員会の方々が接待の準備をして待っていて下さったそうで、いまさらナイドー君を責めてもはじまらない、全部私の責任である。重々陳謝の意は、すでに船に残っていた管理部の方から表明していただいたそうで、これは私の大失敗。

ゴム研究所の見学(2月27日)

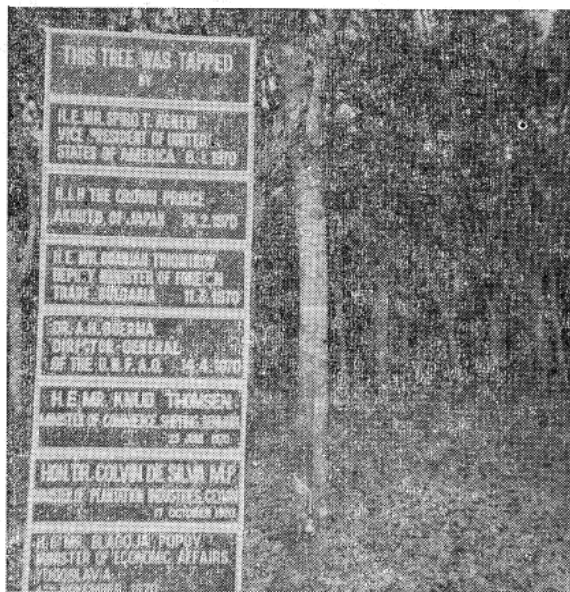
国立のゴム研究所は10エーカー(約1万2千坪)あまりのゴム園と研究施設ならびに生ゴム製造工場からなっている。

ゴムの木の約8割は良質の芽を接ぎ木によって育成するが、残りは種植のままにしているそうである。ゴム液を採取できるまでに3年かかり、10年すれば10メートルに生長する。早朝から始まる採液作業はインド系労働者の仕事で、ノルマは400本から500本、朝6時半から9時半の間に樹皮を削り、その下に鉢をかけ、11時

から回収にかかる。平均1分間に2本半処理しなければならぬ。これでおよそ10たいし15ガロンが採取される。賃金は1日に400円から500円である。

樹皮の削り方には、上から押すように削りおろすのと手前へ引くように削りおろすのとふた通りある。薄く削るから1カ月削っても1センチぐらいで、1カ月分につき白なら白の点を1つ打っておく。この点が12個たてに並ぶと1年分である。1年たつと色を変える。こうして、片側を15年位削ると、つぎに反対側を15年削るだいたい30年が生産年数だそうである。ポートスエッテンハム港の近くに、ゴムの廢材をチップにして製紙原料とする大昭和製紙の工場がある。地元の人にはダイショーワといって歓迎しているようであったが、最近帰国した人がこの工場を指して乱伐公害の元凶のように書いているのをみて、少し事情が違うように思った。もっとも、フィリピンやカリマンタンにおける無計画な乱伐は回復しがたい被害を与えている、とこれは同行の海田農学博士の意見である。

ゴム液採取の実演はインド系の若い娘さんがやってくれた。束ねた髪にハイビスカスの花をつけた美人である。ただし、私はだれでも美人というのであまりあてにはならないが、すすめられるままに教えられた通りやってみるとなかなかうまくいって嚔采をはくした。すぐ横には



切削者銘板。上から3段目に皇太子殿下のお名がみえる。

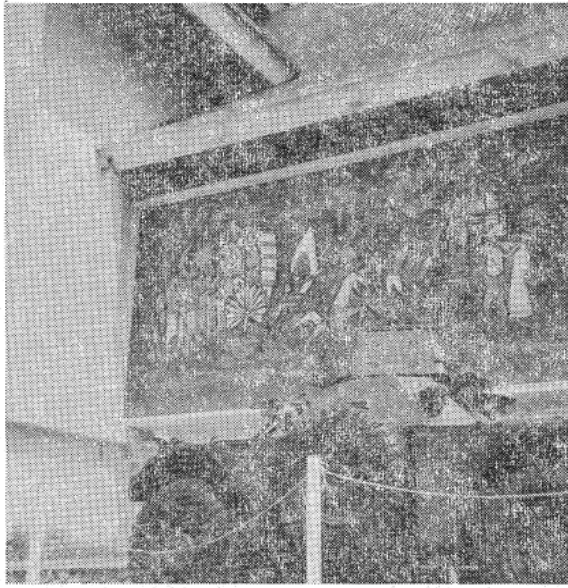
切削を試みた知名人の銘板があって、ちょうど1年前の1970年2月24日、日本のクラウン・プリンス・アキヒト、同年1月8日、アメリカ合衆国副大統領アグニューなどがある。皇太子もこの木で同じことをなさったわけで、世が世なら恐れ多いことである。

この日は船内でレセプションが行なわれ、いずれは各界の名士とおもわれる人々で賑わったが、私はなるべくメインテーブルには近づかないで、周辺をうろうろしていた。1人話相手がなくて淋しそうにしている賓客がいたので「エクスキューズ・ミー」とかなんとかいって話しかけてみた。ペナンにすむエンジニアだそうでボーイスカウトの幹部として招待されたとのことである。色は浅黒く、背は私と同じ位、1928年生まれだから私と同じである。戦争中、日本軍のところで働いていて、航空エンジンの構造や応急修理を習得し、それが今のめしの種になっているとのこと。どこまで本当か、なぜそんなことができたのかわからないが、隊長（とよぶのは陸軍だそうである）から操縦も習った、離陸の仕方だけ教えられて同乗してもらい、着陸は自分でやれというので命がけで降りたが、そういう教え方のほうが今の(マレーシア軍の)やり方よりよい、真剣にやらざるを得ないのである。しまいにはヤマトダマシイはよいなどと熱弁をふるって次第に急ピッチでビールを干しだしたので、まあまあとだめにかかるはめにまでいってしまった。しかし、おもしろい人であった。

ハイウェーに沿った国立博物館の正面両翼の外壁にはタイル・モザイクの大歴史壁画がある。右端から始まって次第に年代が新しくなり、正面玄関のすぐ右側のところで遂に独立をかちとるまでに至る。そのすぐ右隣りは日本の侵略時代で、2人の日本兵が銃を肩に高く歩調をとって、その軍靴がひれ伏す住民の頭上に覆いかぶさるよりのしかかっている。その背景に日本の国旗がみられる。この博物館のある限り、入場者は玄関に最も近いところでこの壁画をみるということを忘れてはならない。

日曜のショッピング(2月28日)

2月の最後の日、日本では冬もいよいよ峠を



国立博物館の壁画。左端はマレーシア独立、その右隣りに日本の国旗がみえる。

越し、明日からは3月である。だが、ここには四季がない。クワラランプールは一年間を通じて毎月の平均気温が25℃前後で気温の変化がないといってよい。船に80才近い日本出身の婦人が日本の船を懐しがって尋ねてきたが、天草出のこの人は日本を離れて何十年、上海をはじめ各地を転々としたらしい。しかし、ここは気候がよいのでもう日本には帰りたくないといっていた。故国を離れて何十年、しかし非常にしっかりした日本語であった。同伴した青年、彼女の孫に日本語を教えたいので、日本の国語の教科書を送って欲しいというのが彼女の望みであった。

さて、この日、出国手続きのはじまる午後3時半までは自由視察かつショッピングということになった。ところがこの日は運悪く日曜日でショッピング・センターは休み。中国人がかりうじて開店していたが、日用品程度しかなく、やむなくホテルの売店に廻ってみた。しかし、ここも大部分閉店。ホテルのプールでは、街ではあまり見かけなかったいわゆる西洋人が、日曜日であるためか、かなりの人数がプール・サイドで寝そべっていた。

たまたまクワラランプール第1という錫製品の店があいていて、ここに仲間が群がっていたが、かなり高価である。値切ったりするのはあまり格好よくはないが、東南アジアでは値切ら

ないのも馬鹿である。しかし、こういう一流の店は絶対まけない。それどころか端下の釣銭を渡そうとしないので要求すると不性無性くれる始末である。

腹が減ってきたのでマレーシア料理を食べようということになり、繁華街の立派な店構えの店にはいった。メニューは漢字、英語、マレー語で書いてあるが、漢字の魚とか、揚とか油とかを拾い読みして注文し、空腹を押さえて紳士らしく鷹揚に構えて待っていた。だがつぎつぎ運ばれるのは、かろうじて魚の原形を保っている、ぐじゃぐじゃしたものや、メリケン粉のどら焼にからし色の液体をぶっかけたものなどでどれも口に合わない。マレーシア料理とはこんなものかと思いながら、どうにか空腹を満たし店の出がけにボーイさんのくれたマッチをよくみると蒙古風料理専門店と書いてある。

この日のショッピングはあまり楽しいものではなかったが、マレー料理変じて蒙古風とはわれながら滑稽である。話は前後するが26日に、例のナイドー君が連れていってくれた現地人向きの市場での買物の方がおもしろかった。まん中がちょっとした広場になっていて、その周辺に住宅を兼ねた小さな店が並んでいる。中には散髪屋もあって、記念にとかけ込んで、せき前で刈ってもらっている日本の青年もいる。30円である。レコード屋では現地人の流行歌らしいのがかかっていたので、記念に買い求めたが、これもいいといってすすめてくれた方は帰国後聞いてみたが、この方はあまりよくなかった。最初の方は家でも評判がよく、何となくマレー的な感じがする。荒物屋には何に使うんだかわからないような日用品があって、みやげとしてはむしろこういうものの方がおもしろい。1つ100円で2つ買って帰った藤の買物籠は何ともいえないおもしろい形をしていて、いわば本当の民芸品である。

同じ日にナイドー君が案内してくれた高級住宅街にある中規模の仏教寺院も南方小乗仏教式で日本のお寺とは全く趣きが異なり、われわれには珍しかった。建物の内部はがらんとして、よけいなものは何もなく、ただお堂の正面に大きなお釈伽様が端座なさっていて、よい線香の



クワラ・ランプール郊外の仏教寺院、
風景の邪魔をしているのは筆者。

かおりが流れている。参拝者は履物を脱いでコンクリートの床の上に直接敷かれた敷物の上で正座して拝むのである。誰がどう管理しているのか、建物のまわりにも中にも誰もいなくて、非常に親しみ易い仏様である。

船はインドに向う（3月1日～3月3日）

3月1日未明、烈しい雷光で目をさまし、船窓の外をじっとみていると珍しい現象が起こっていることに気づいた。遙か水平線上に雷光によって照らし出される大規模な積乱雲がみえるのだが、その右方に、おそらく何十キロも離れているであろう、同じような積乱雲が対峙している。そうして一方ではげしい雷光が起こると相呼応するように定期的に数秒後に他方で同様の雷光が起こる。電気エネルギーの蓄積と放電との間に何かこの現象を説明しうるものがあるのだろうか。はじめは偶然の現象かと思ったが約十数分間に何回も繰返し起こったので、暗夜に恐い自然現象の秘密を覗いたような無気味さをおぼえた。

この日は終日、スコールが何度か襲来し、暗雲低くたれ込め、夕刻からはローリングも烈しくなった。とき折左舷はるかかなたの雲の切れ目に、北部スマトラの美しく重なる山々が遠望され、船はいよいよニコバル諸島に近づいている。夜には映画会が催され、「船の旅」「座頭市牢破り」が上映された。日本との時差はすで

に2時間半にもなっている。

3月2日、終日海ばかり、どういうわけか、サマーセット・モームの「東洋航路」横光利一の「旅愁」などが思い出される。やるせない単調さが人の思考を狂わせるのだろうか。午後は予約どおり船内の床屋さんで散髪。髪結いさんもちゃんとある。それぞれ別の部屋になっていて、両方ともフル操業である。田舎の床屋の設備ぐらひはなされている。

夕食後卓球をしながら、今夜はダンス・パーティーがあることを思い出し、いっちょうやるかという気になって第1礼装でバンケット・ホールの会場に出てみた。会場は照明を絞り、ふんいきも上々。パーサー（事務長）も心得たもので、長身でみごとなステップを踏んでいる。若い女性にプロポーズして暫く踊ったあと、壁ぎわでてれくさそうに立っている青年に引渡すという風に気をきかせてムードを高めている。私も昔とった杵束、かねて意中の人、いやわれわれの恐れ多くも副団長たる松本千代栄先生にプロポーズして踊っていただいた。何しろ当時東京教育大、体育学部教授で、日本女子体育連盟理事長、現お茶の水女子大教授、しかも事もあるに比較舞踊論の大家にプロポーズしたのである。「なかなかお上手です」とのお世辞を真に受けて喜ぶなど、私も長生きする方であるらしい。

3月3日、ひな祭である。わが家ではひな人形を出したのだろうか。帰国してからわかったが毎年、私のする大仕事ということになっているので出さなかったとのこと。また大学入試が始まって例年なら試験監督に出ているところ。あすはいよいよインド入国。ラジオ・オール・インディアのディスカッション出席予定者のための予備勉強会に、東南アジア事情担当教官の1人として出席する。夜は3組主催のひな祭に出席。また食堂ではみつ豆の特別サービスなどがあり、なんとなく故国のひな祭ムード、なにしろ20才から26才までの女性が100人以上も1つ船にいるのだから。もう1つおもしろかったのは船首、ふな底の卓球場で、ピッチングとローリングに翻弄されながら1時間ばかり卓球をしたこと。ピンポン玉も自分の身体もどこへ行く

かわからず、エレベーターで昇り降りしているようで、船ならではの味わえない珍プレーであった。

マドラス（3月4日～7日）

3月4日。早朝5時半甲板に出る。むっとしている。さすがに熱い。このぶんだと日中は炎熱だろう。とうとうインドまでやってきた。全く異なる文化圏へは万里の波濤を越えてはるばる来なければならない。玄奘三蔵は仏教原典を入手するためにゴビの砂漠、ヒンズークシ山脈を越えてインドに入国したのである。（この玄奘の遺骨が日本にあるといえは本当にされるだろうか。）小ヨーロッパが全部入ってしまうような大きな国であるインドにやってきて、そのたんなる1点にしかすぎないマドラスとその周辺を数日見聞ただけでインドを語ることはおこがましいことである。滞在期間中の見聞を日付を無視し、断片的に書いてみよう。

運転手の気質 領事館側の話では、住民はおとなしく、人殺しなど年に1回もない、せいぜい石の投げ合いぐらいということであったが、われわれのバスの運転手があわや、とっ掴み合いをやる場所だった。バスは猛烈な勢いですっばす。途中、工事中で片側通行のところをわれわれのバスが強引につっ込んでお互いのサイド・ミラーが手のひらを合わせるような格好で止まってしまった。それをまた強引に進んだために相手のサイド・ミラーが割れてしまい猛烈な口喧嘩。向うの乗客まで殺気立ち、多少の危険も感じ、団員にまちがいがあってはいけないのでこちらから頭を下げ、運転手を催促して出発し難をのがれた。熱いので履物は横へ脱いで素足でアクセルを踏んでいる。それから、日本なら敬遠して人が近寄らないようなルンペン同様の男が1人乗っていて、これがどうも助手らしい。しかし、ドアを開けるわけでもなく、バックのときに誘導するわけでもない。ただ、いるというだけで結局、終日何もしなかった。

男はしゃがんで 後続のバスが点灯して停車要求の会図。女子団員がもう我慢できないらしい。引率責任者としては断腸の思いで、もう少し辛棒するようにいいきかせて、家の少ない田

園地帯までフルスピードで前進。便所がないことは前からわかっていたので、かねての予定どおり男子団員が、バスの屋根にくくりつけてきた4枚のベニヤ板と荒縄とスコップで他人の畠のまん中に特設お手洗いを設営にかかった。

このさい、わたしもしておきましょうというツレション組もあらわれて、10人あまりの女子団員がもじもじしながら行列を作っている間に問題の突貫工事は完成に近づいた。ところがこのとき笑えぬ珍事が起こってしまった。その少し前から気にしていたのだが、遙か向うの森かげから、1人、また1人と子供が出てきて、さすが人口過剰の上、就学率の低い国、たちまち2～30人あまりにふくれあがったのが、はじめは忍び足だったのに、何を思ったのか突然走り出し、あっという間に工事現場を包囲してしまったのである。先ほど来、我慢に我慢を重ねてきた先頭の彼女は泣き出さんばかり、これは人道問題である。長老らしい腕組みをした現住民に英語であっちへ行ってくれと言ってみたが全く通じない。ガイドのマドラス大学の研究生に現地語で説得してもらってやっと包囲をとくことに成功。ところが、今度はその子供たちが、道路から畠の方に向けて砲列を敷いている日本青年の方に行って大笑いしている。同行の三井物産マドラス支店長のサエグサさんの語るころでは、この辺では男はしゃがんでするので、

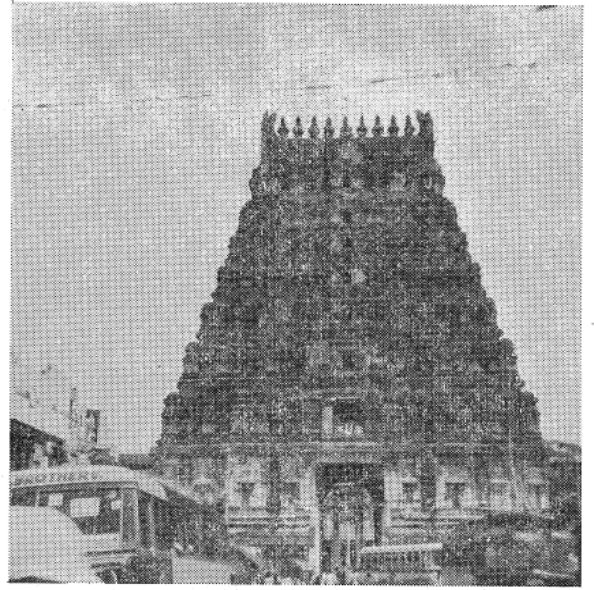


例の突貫工事の現場でインドの子供たちとともに。左から2人目は女子団員。

いったいどの野蛮人だろうと思ってみているらしい。下着などはいていないから女性が立っただまやることだってある。暫らく、あらぬ方を眺めて立ち止まった女性が、ふたたび歩き出した跡に小さな水溜りができているとすれば、これは文化人類学的発見である。少々はね返って濡れる位、何でもない。ヒンズーのお寺にはタンクといって石造の四角い池があるが、ここに入ることは宗教的意義とともに水浴を兼ねている。着衣のまま入って、上ってくれば裾の方を手掴みでしばって、そのまま歩いているうちに乾く。本堂の前で拜むときも20円位で小さなヤシの実を買って、その辺の石の角で割って、すばやくその水を頭からかける。齋戒沐浴と頭の冷却を兼ねている。

コロマンデル海岸 地図でみるとマドラス付近は南北1千キロにわたり、ほぼ一直線の海岸である。マドラスはこの海岸に沿った人口200万の大都会で、海岸通りから海岸線まで、かなり広大な砂浜がある。土地の人は行ったことがあるのかどうか知らないがハワイより美しいという。ところがこの絶好の海岸で誰1人泳いでいないのである。それもその筈。ガイドブックには饜がうようよいるから絶対泳いではいけなと書いてある。ところが、ここに勇敢な日本青年がいたらしい。マドラス大学生の語るところでは京都大学修士のシンジ・シゲマツはインドの村落経済史の研究に来ていたとき、よくこの海岸で泳いだというのである。

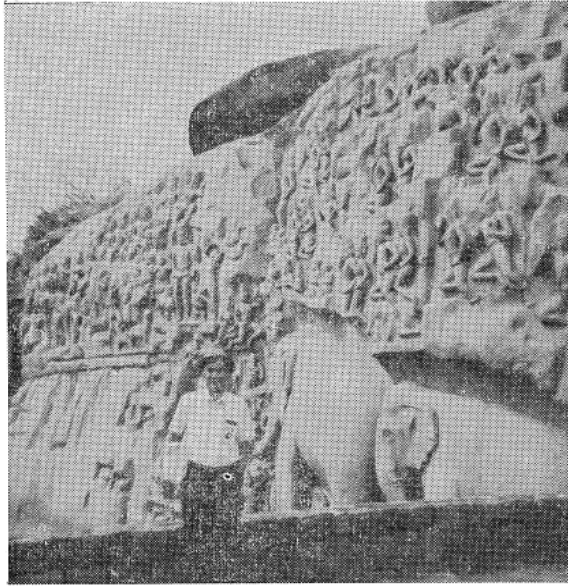
この海岸を約60キロ南下するとマハーバリプラムという村落がある。ここは7世紀に栄えた港町で、さらに、40キロばかり内陸へ入ったところにある7世紀の古都カーンチープラムの外港であった。同行の宗教哲学者、藤田教授によればカーンチープラムはダルマ大師の生地だそうである。マハーバリプラムのさまざまな岩石彫刻は世界的にも有名で、「5つのラタ」「ガンガ河の降下」「海岸寺院」の3つがある。それぞれ離れた場所にあるが、ラタというのは車のことらしく、もともとそこにある岩石に内外から彫刻したもので、日本の山車(だし)、大阪でいう、ダンジリを型どったものと思われる。カーンチープラムには祇園祭の山鉾そっくりの



バラダナータ寺の寺門を外から望む。

山車があったが、その先祖にあたるものだろう。何のために5つのラタを作ったのか、一説によれば、当時、すなわち1千2百年以上のむかし、この付近にあった彫刻学校の習作とのことである。作りかけで未完成のものもある。「ガンガ河の降下」はインドの神話を丘の一隅にある巨岩に浮彫りしたもので、人間も象も蛇もありとあらゆる生きとし生けるものが、神の恵みの下に豊饒を贅える生の喜びが溢れているような作品である。「海岸寺院」はもとは7つもあったらしいが他は水没し、波打ぎわにただ1つだけ残っている。2つのピラミッド型の塔が水平線を背景に浮かび上る美しいヒンズー教建築で8世紀の建立である。

マハーバリプラムは遺跡であるが、カーンチープラムは現在も善男善女の参拝が絶えない生きた信仰の町である。7世紀建立の大石造寺院がいくつかあるが、その大きさはエカンパレスバラ寺のゴープラム(石造寺門)の高さが100mにも達することで想像できよう。われわれはヴァラダナータ寺に詣でたが、寺門の外でバスを降りて裸足になり、カメラ1台につき20円ばかりの拝観料を払って中に入った。私には彫刻の知識は皆無であるが、このマドラス南方の彫刻群、それにマドラス美術館所蔵の彫刻から受けた印象は全く強烈で、大げさにいえば、その印象の本質が何であるかを知るためには、生涯反芻を繰り返さねばならないし、機会があれば



「ガンガ河（ガンジス河）の降下」

何度でも行ってみたいと思うくらいである。

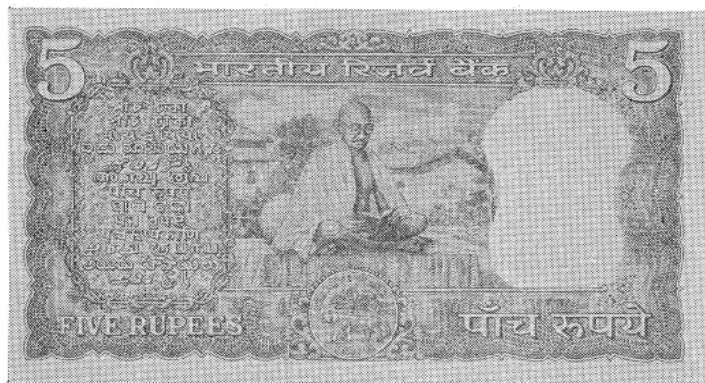
インドの牛 インドに牛が多く、インドの進歩を妨げているというようなことは誰でも知っている。しかし、実際にこの眼でみると、かなり違った印象である。牛は人口2人に1頭、つまり2億頭いるといわれる。郊外に出ると沿道の水溜りのようなところで牛の群が水浴をしている。車がつっ走る舗装道路の真中を、ゆうゆうと歩いている。野生の牛のように飼主はみえないが、実はみな飼主がいて、朝、放すと、どこかで一日過ぎて夕方帰ってくるらしい。牛の利用価値は非常に大きい。インドの食事は何でもどろどろしたものをかけるがその重要な原料は牛乳である。牛糞は低所得者層の重要な燃料で、適度に蒸発したのを手で丸め、円板状に平たくして、家の入口の周辺にくまなく張りつけて乾かす。木の燃料を使うのはもっと所得水準の高い層である。角や骨も大いに利用価値がある。さらに農作業の動力源でもある。インドでは牛が太っていて人はやせているといわれる。だが実際には牛もやせている。

どこでも幹線道路は立派で、ここをスピード・メーターが壊れてしまっているオンボロバスが60キロから80キロぐらいでぶっとばす。道路の中央に向かって、道路と直交する方向に寝そべっている牛が、驚いたことにバスが通過する間だけ、身体はそのままにして頭だけ横を向けて

バスをやりすごすのである。発展途上国では歩行者、荷車、自動車、それにインドでは牛までも混合して利用するので、事故率は意外に高く悪い意味のモデル地区として、1960年国連の交通問題の国際会議がマドラスで行たわれたくらいである。堂々たる警官が道の中央の傘の下の踏台の上で鍋の蓋のようなゴー・ストップのサインを突き出して交通整理をしているのもおもしろい。鍋蓋のまん中に4分の1の円板がちょうつがいのようについていて青の面と赤の面が出るようにたっている。とにかく、所変われば品変わるで、イエスのときに首を横に振ったりするからややこしい。世界は広いなあと思う。

タミール・ナドゥ州 われわれはインドに行ったというよりドラヴィダ族の国、タミール・ナドゥへ行ったという方が正しいかも知れないこの地方の人たちは自分たちがドラヴィダ族であることを誇りに思っており、現代インドの支配民族、インド・アーリアンよりも、はるかに秀れた古い文化の継承者であると自負している。独立運動もある程で、州の名称もマドラス州からタミール・ナドゥ州に変わったのである。マレー半島方面の印僑はほとんどこのドラヴィダ族で、タミール語を話す。例のナイドー君の名前は印僑の代表的なカースト名である。

南部4州、約1億人余はこのドラヴィダ族でその起源には2説あるらしい。1説はB. C. 4千年ぐらい前、地中海方面からやってきてインドに住んでいたが、B. C. 1千5百年頃コーカサス方面からやってきたインド・アーリアンに追われ南方へ移動したという説で、古代インド文明を築いたのは彼らであるという。最近、モヘンジョ・ダロ、ハラッパーの遺跡の解読不能の文字をインド・ロシア学者がコンピューターで解読し、いっそうこの説が有力になったときいている。第2説は南方海岸に辿りついた民族が海岸伝いにインドに定着したという説である。ここでこの問題に深入りはできないがとにかく一口にインドといっても非常に多様である。憲法上認められた言語は14あり、方言の違いなどでなく、文字も違うのである。すべてのインドの紙幣には英語を含め15の言語で額面が印刷されている。レセプションに出席された



5ルピー紙幣，左端に13の言語，下には2つの言語で5ルピーと書かれている。

州知事などは、一国の宰相いやインドの王様といった貫録で、入場されるときは厳肅をきわめ着席されてからも微動もせず、やがて御老体ゆえの退席に至るまで、一国の象徴のような威厳に満ちた風格であった。きくところによると若い頃からの親日家で、挨拶の要旨は次のようであった。「日本は昔、われわれの国から多くのものを学びとった（仏教のこと）。いまやわれわれは与えるものがない。日本は天然資源に乏しいときいている。しかし、知識・技術の水準は非常に高い。それをわれわれに与えてもらいたい。日本は礼儀正しい国である。ハラキリは責任を重んずることのあらわれである。」

在留邦人のこと 紙数も尽きようとしているが、最後に、一言どうしても触れてお礼を申し述べたいのは、在留邦人の方々のわれわれに対するおもてなしである。マドラスと日本の交流は少なく、日本の船が鉄鉱石を積みに来るぐらいである。家族を含めても30人あまりで、土屋総領事御夫妻、清水領事、マユズミ副領事、それに当時ケニヤから転任されたばかりの古川副領事、民間の方で私の記憶にあるのはマドラス日本人会々長、三菱商事マドラス支店長の中島氏、副会長、丸紅のアラタニ氏、同森本氏、住友商事の荒木氏、三井物産のサエクサ氏、それに日商岩井のツルオカ氏、三菱商事の服部氏、佐竹製作所のハクシマ氏などである。土屋総領事はもと宮内庁の儀典課長をしておられたそうで、一点の非の打ち所もない身だしなみ、ダンディではあるがやや神経質にみえる古武士のような風格で、時間について厳格なことは半年も

前から知らされていた。土屋夫人は全く対照的な、地味で暖かな感じの親しみやすいタイプの方であった。われわれの滞在中4日間、商社の方々も総出で終始、接待や案内をつとめて下さった訳で、どういう理由でこの好意に甘えることができるのか、どのような形でお礼の気持を表わせばよいのか困る程、献身的なサービスをうけたのである。船側主催の船内レセプション、総領事招待の総領事公邸でのレセプションでわれわれはこの方々と、日本人の少

ない遙か南インドのマドラスで楽しいひとときを過した。公邸でのレセプションでは御婦人方も総出で腕をふるって接待にあたられた。男子団員の久住君はレコードで詩吟を吹き込む程の名人だが、土屋総領事が彼の詩吟を感慨深げに聞き入っておられた様子が今も偲ばれる。

話はそれるが、船内レセプションでのこと。太った外国婦人と話しているうちに、マドラス駐在ソ連総領事夫人とわかった。ハズを呼んでこようかという。「ノー・サンキュー」。中学2年のお嬢さんも英語がうまい。えびせんべいと、のり巻のおかきがうまい、何を原料にどうやって作るのかというようなことが話題になり私としてはソ連の人と話すのは初めてで愉しかった。船好きの私は、夫人がボンベイに5年いて、マドラスへ来て2年だときいた途端に、それはソ連艦隊のインド寄港地である、ソ連のインド洋への関心は強い、などとすぐ思ったが、もちろん口には出さなかった。ただ、ここに記録だけはしておきたいと思う。

インドよさようなら われわれは有名な舞踊学校（世界各国から習いにくる）の、インドでも有名な数々の舞り手を見たし、カトリック系の11年制ヴィジョダヤ女学校（私の娘の学校の制服と実によく似ている）や少年の町、身体障害者施設（いずれもカトリック系）、日本の大崎電気の技術を受け継いだ電気メーカー（積算電力計メーカー）マドラス美術館などを訪問し語ることも多いが、ぼつぼつインドともお別れしなければならない。

さくら丸の船長は国際的には海軍大佐待遇で

向いに停泊中のインドのフリゲート艦の艦長は中佐とのこと、最初に向うから本船の幹部にお茶の招待があり、ついで本船のレセプションに向うの艦長以下3名が来られた。このような交流があったので、われわれの船が出帆するときには、航海の無事を祈るという旗をあげ、2百人余りの水兵さん（頭に白いきんちゃくのような帽子をのせている）が整列して見送ってくれた。こちらの「楽団南十字星」は「軍艦マーチ」で応えた。私は「軍艦マーチ」には少々神経をとがらせたが、問題にならないようなムードであった。おそらく軍艦が商船に敬意を表するというようなことは稀であろう。

マドラス沖には新和海運の「日鉦丸」がおり乗組員総出で見送ってくれ、「祈、航海安全」の電信があったと船内マイクで伝えられた。

南インドでのさまざまな寄港地活動も終わった。インドはちょうど全国で下院議員の総選挙中であり、ガンジー女史率いる国民会議派左派

の大勝する直前、また東パキスタン動乱の直前にあたる政状不安定なときでもあった。だが、いまはすべて静かである。船は静かに、マドラスを、インドを離れていく。昔、「大地のうた」というインドの長編映画をみた。インドの田舎について、私の身体全体でうけとめた印象はその映画のとおりであった。田舎では脚が丸太棒のようにふくれた老婆をみかけた。象皮病という風土病だが医者の手はまだ及んでいない。独特の石臼で、カレー粉や豆類をごろごろ終日ひいている。これが水汲みとともに主婦の大事な仕事である。一方では早くから原子力発電が始まり他方ではこのような生活である。だがインドよさようなら。空気が澄んでいるためか、マドラスの高層建築の先端のいくつかが水平線の彼方に沈むまではっきりみることができた。あとを追ってきたかもめも離れていった。6時5分、すばらしい夕陽が水平線に落ちて行った。

(以上)